

## 第六十四回神田古本まつりの收穫（中）

土屋 博

### 十七「修正日本略史 下巻」峰岸米造編

（合資會社六盟館、販賣所明治圖書、明治四十一年刊、定價金六拾錢、二〇八頁）  
古書價格二百圓也。初版は明治三十六年。新井白石の箇所より、「從來皇子皇女は多く佛門に入り親王家はただ伏見・京極・有栖川の三家に過ぎざりき。君美これを歎き皇子をば親王とし皇女をば降嫁あらしめられんことを建議したり。家宣これを納れ、奏して皇弟直仁を立てて親王とし閑院宮と稱せしめたてまつりき」と。

### 十八「第四 明治才媛文集」女子の友記者編纂

（東洋社、明治四十二年九版、定價金貳拾五錢、二五二頁）  
古書價格八百圓也。初版は明治三十六年。福岡榎本も子さんの「元日の記」より、「さし昇る初日の光りきのふにかはりてなにとなう花やかなる心地するに、門毎にひらめく御旗たて渡したる松竹の翠は、常磐の色にほひ、君が代謳ふ稚子の聲は、千代と囀づる鳥の音に和して榮ゆく御代の元旦のけしきこそ、いひしらずめでたけれ」と。文語表現、美しかりき。

### 十九「六大先哲」帝國教育會編

（弘道館發兌、明治四十二年刊、正價金五拾錢、二〇三頁）  
古書價格七百圓也。明治四十一年二月二十三日贈位先哲祝典大會の議事録なり。六大先哲とは、山鹿素行、山崎闇齋、中江藤樹、伊藤仁齋、青木昆陽、新井白石を指す。（明治四十年に正四位贈位。）記念講演者は、素行より順に、井上哲次郎、谷干城、三宅雄二郎、竹内松治、大槻文彦、三上參次と、いづれも當代一流の人物なり。三宅雪嶺曰く、藤樹四十一一年の壽なるも、その徳の感化の及ぶところは尋常に非ずと。

### 二十「鎌倉武士」大町桂月著

（弘學館、明治四十二年刊、正價金壹圓、本文三三一頁）  
古書價格千圓也。大町桂月序に曰く、「われ、さきに平安朝後半の歴史を草して『源氏と平氏』と題したり。今茲に鎌倉時代の歴史を草して『鎌倉武士』と第す。……余は茲に本書が主として大日本史と吾妻鏡とによりて成りたることを一言す。」と。

### 二十一「本居宣長之哲學 全」文學士田中義能著

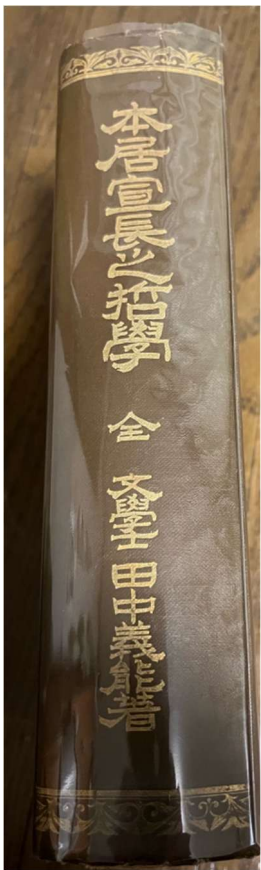
（日本學術研究會、明治四十五年刊、定價金貳圓拾錢、六一六頁）

古書價格五千五百圓也。今年の古本まつり、最大の收穫品とこそいふべけれ。

目次は第一編總敍（經歷、性行、學風、著書）、第二編學統（復古神道の發展、學祖春滿、學父眞淵）、第三編本論（世界論、原理論、宗教論、學問論、異端論）、第四編學派（春庭、大平など）、第五編統括（宣長學の反動、諸家との比較、批評）。

結語に曰く、「徳川氏三百年の榮華忽焉として亡び急轉直下王政復古の鴻業成る。素より時運の然らしむる所なるべしと雖も、而かも此の時運を醗釀するに於いて、我が宣長の復古神道唱道の功、與つて大ならずとせず」と。

田中議能（よしとう）（一八七二年生れ、一九四六年歿）は神道學者。東京帝大哲學科卒、東洋大、國學院大の教授を経て、一九二〇年より東京帝大助教授。



## 二十二「聖賢格言集」福田重政著

（梁江堂・春秋社、明治四十五年刊、三三六頁）

古書價格五百圓也。二度目の購入。今回は函入。荀子「青色は藍より出でたるも藍より青く、氷は水より出でたるも水より冷かなり」について、是れ弟子の學藝は師より授けられるも、勉學研磨の如何によりては師に優る者の出づるに喩ふと。

## 二十三「古今の婦人」婦女新聞社編

（婦女新聞社、大正元年刊、定價金九拾五錢、四七八頁）

古書價格五百圓也。末尾の廣告によらば、婦女新聞は毎週金曜日發行、創刊十二年に及び毎號皇后陛下御覽の榮を忝うすとあり。目次をみるに、塚越停春「小野小町」（『平安朝歌界に於ける位置は業平第一、遍昭第二、小町第三』云々）、長田偶得「春日局」、下田歌子「松下禪尼」、大町桂月「尼將軍」、山路愛山「紫氏清女合論」（『紫氏清女の時代は日本全國の富が最も多く都に集中したる頭重尾輕の時代なり』云々）、幸田露伴「八大傳に現はれたる二女性」、武島羽衣「源氏物語に現はれたる十二女性」（『紫の上、紫式部が理想の女性なり。容色群を抜き、詠歌音樂書畫盡く備はらざる無し。』云々）など。

## 二十四「大正文庫第一輯 明治思想小史」三宅雪嶺著

（丙午出版、大正二年刊、定價金五拾錢、一二八頁）

古書價格五百圓也。小生、これまで復刻版のみを所有したる所なれば、原書の入手は永年の夢なりき。

第十六章「和學漢學洋樂」にいふ、「徳川時代は大體に於て學問則ち漢學であつたが、……王政復古の名に伴ひ、和學は皇祖皇宗の國家に缺くべからずと認められ、多少之を修めねばならぬ事になつた」と。

## 二十五「散文偉觀」厚生堂編集部編

（厚生堂、大正三年刊、正價金壹圓八拾錢、千頁）

古書價格千圓也。目次は、第一章書翰文、第二章記舒文、第三章傳記文、第四章論說文、第五章情感文、第六章祝賀文、第七章迎送文、第八章弔祭文、第九章序跋文、第十章諭令文、第十一章聲調文、第十二章雜體文。たとへば、本居宣長の新年を賀する文、「新歳の御慶御同前萬福目出度申納候。先以愈々御安全に御重歲なさるべく珍重に存じ奉り候」云々と。

## 二十六「現代名家文選 桂月文集」

（帝國行政學館史書研究會出版部、大正五年十版、定價金六拾五錢、四四四頁）

古書價格五百圓也。初版は大正三年。

末尾の「國學復興論」には、「公卿の手にありし國學は武士の手に落ちぬ。武士の手より更に又平民の手に移りぬ。而して益々革新の勢を添へぬ。長流は素浪人に非ずや。季吟は一祠官にあらずや。契沖は一貧寺の僧にあらずや」とあり。

## 二十七「繪入訓話」大町桂月著

（富山房、大正五年刊、

古書價格五百圓也。冒頭に「留學五人男」の英國留學中の寫眞あり。長州藩の君命を受けたるは、井上馨、井上勝（後に鐵道王）、山尾庸三（後に銀行家、高輪の大地主）の三名なれど、井上馨侯の推薦により、伊藤博文及び遠藤謹助を追加せりと。

## 二十八「文話作例 新作文」大町桂月著

（大倉書店、大正七年刊、定價金貳圓參拾錢、七五六頁）

古書價格千圓也。大町桂月、序に曰く、「文を學ばむには先づ大に名文を讀め。その名文も程度の低きものより始めて高きものに及ぶべし。現代より始めて古代に及ぶべし。之を驚にて云へば首を傾けて善く鳴く親鳥の聲を諦聴する也」と。目次は、前編文話、後編文範。

## 二十九「小紙庫」三宅雄二郎著

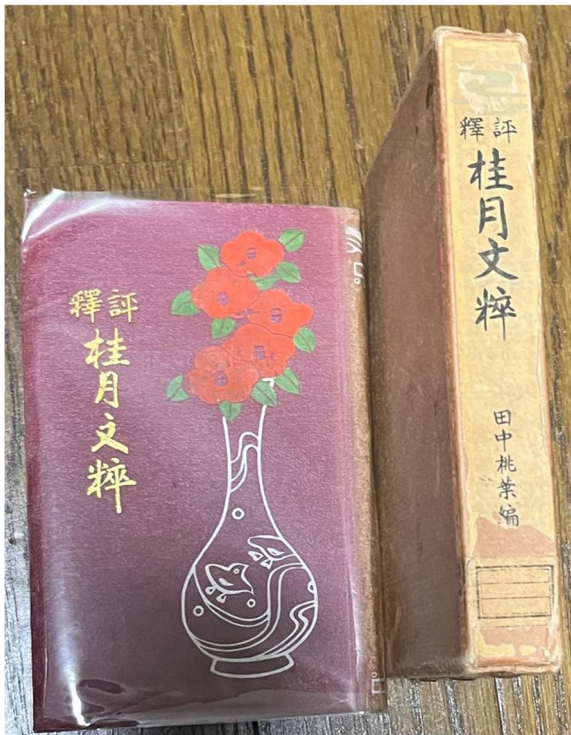
（耕文堂、大正七年刊、定價金壹圓五拾錢、四四二頁）

古書價格五百圓也。何度目かの購入なり。目次は、世界の大勢、政治と人物、社會と生活、風教修養。三宅雪嶺、序に曰く、「永平寺の和尚は庭前の石を指して曰ふ、吾は金なくして石ありと。著者は庭の代りに壁に面して曰ふ、吾は金庫なくして紙庫ありと。本書は紙庫の小なる者、内に何らかの思想を藏す」と。

### 三十「評釋 桂月文粹」田中桃葉編

（駸々堂、大正十三年刊、定價金八拾錢、四〇九頁）

古書價格二千圓也。函入。冒頭に編者桃葉の「桂月先生の文章」なる作文を配す。次いで桂月作文「柏木の閑居」より「某高利貸しへの手紙」までに桃葉の評釋を附す。後半には「評釋名家文粹」と題し、鷗外、漱石、一葉、諭吉、露伴、紅葉、蘇峰、樗牛ら名家の文章につき、評釋文を附す。



### 三十一「靜思餘錄」徳富猪一郎著

（民友社、大正十三年改版、定價金貳圓、二九四頁）

古書價格二百五拾圓也。函入、天金。徳富蘇峰の國民叢書卅六刷中の代表的著作なり。元の國民叢書二冊を始め、講談社學術文庫も含めて、幾度目かの購入となる。

今回の古書は、同志社森中文庫の一冊にして、「森中重光」なるサインあり。ちなみに、森中重光氏は、「新島襄先生の生涯」の著者にして、一九九〇年に九十六歳にて歿したる人物なり。



### 三十二「中等教科 日本歴史教科書 上級用」三省堂編輯所編纂

（三省堂、大正十四年修正六版、定價七拾參錢、本文一六六頁）

古書價格五百圓也。初版は大正六年、修正再版は大正七年刊。高野長英の座右の銘オランダ語筆跡は興味深し。その英譯は、Study! The drops of water make a hole in a stone, not with power, but only as they fall on it many times.  
1836 Doctor Takano Tyoei

三十三「新釋 太平記讀本」足立栗園著

(石塚松雲堂、大正十四年刊、定價金參圓五拾錢、四六四+四五七頁)

古書價格三百三十圓也。例言に曰く、「本書は有名なる太平記を通俗的に書なほして青少年の讀物としたものである。……太平記が如何に幕末勤王の志士に依つて愛讀せられたかは、本書を繙く者の必ず首肯する所であらう」と。



(令和六年十二月十五日受附)